

青森県近代文学館報

葛西善蔵生誕一二〇年特別展

会期 平成29年7月8日(土) ～ 9月18日(月)

葛西善蔵は明治20(一八八七)年、弘前松森町(現弘前市)に生まれ、家族とともに北海道や青森町(現青森市)、五所川原村(現五所川原市)を転々とした後、碓ヶ関村(現平川市)で育ちました。青年期には上京と帰郷を繰り返し、大正元(一九一二年)に同人雑誌「奇蹟」に処女作「哀しき父」を発表。大正8年には第一創作集『子をつれて』(新潮社)を刊行しました。大正9年には『馬糞石』(春陽堂)を、大正13年には『権の若葉』(新潮社)を刊行。貧困と病の中で身を削るようにして作品を書き、私小説・心境小説の第一人者として注目され、昭和3(一九二八)年に41歳で亡くなりました。

「日本の純文学は葛西善蔵の死と共に滅びた」とは、「奇蹟」同人だった谷崎精二が昭和30年に刊行した『放浪の作家 葛西善蔵評伝』の中に見られる言葉ですが、その文学は多くの人によって振り返られ、活発な顕彰運動が

展開されてきました。これまで全集は

異なる出版社から4度刊行され、文学碑は北海道の芦別市、青森県の平川市(旧碓ヶ関村の三笠山)、弘前市(徳増寺の墓碑)、栃木県日光市湯元温泉と4基が建立されました。近年も少なからぬ作家が、著作やエッセイの中で葛西善蔵について言及しています。生誕一三〇年という節目に当たり、時代を超えて熱烈な愛読者を獲得し続ける葛西善蔵の文学の奥深さに迫ります。

書軸や書簡、遺品のほか、全集未収録のエッセイ「帰郷小感」を収めた「青年」第9巻第9号(大正13年9月発行)をはじめ、当館で平成10(一九九八年)に開催した没後七〇年特別展の際には存在が知られていなかった新資料もいくつか公開できる見通しです。

仰山曾不遊山

書簡片

葛西善蔵書軸「仰山曾不遊山」

目次

・葛西善蔵生誕一二〇年特別展……………	1
・特別展「青函を旅した文人たち」開催報告……………	2
・三上強二寄贈資料展開催報告……………	4
・出張展「北村小松」開催報告……………	5
・エクステンド常設展示「石坂洋次郎と太宰治」……………	6
・第15回青森県近代文学館川柳大会……………	6
・全国文学館協議会共同展示……………	6

□没後80年・菊谷栄展

会期 平成29年10月28日(土)

～平成30年1月14日(日)

菊谷栄(本名栄蔵)は、明治35(一九〇二)年青森県東津軽郡油川村(現青森市)に生まれました。大正10(一九二二)年に上京し、日本大学法学部美学科に入学するとともに川端画学校にも通います。昭和5(一九三〇)年エノケンこと榎本健一の新カジノフオリーに舞台装置製作で参加した後、エノケンの座付き劇作家として活躍、「リオリタ」、「パリの与太者」、「ヤンキー若様」、「民謡六大学」などのヒット作でエノケンの黄金時代を支えました。しかし、昭和12(一九三七)年9月兵役召集を受け、11月9日中国南和で戦闘中に撃たれ戦死してしまいます。本展は、菊谷栄の業績を概観するとともに、竹内俊吉、太宰治をはじめ本県文学者との交流とその影響について紹介するものです。

□「本の装い」展

会期 平成30年2月24日(土)

～5月20日(日)

手に取って読みたいと思う本に装丁

・日曜午後の朗読会「おとなのためのものがたり」……………	7
・パネル展開催……………	7
・エクステンド常設展示「佐藤紅緑と福士幸次郎」……………	8
・青森県俳句懇話会寄贈資料展……………	8
・資料寄贈者紹介……………	9
・資料寄贈者のお願い……………	11
・館務日誌……………	12

の美しい本があります。鮮やかな表紙、カバー、挿絵はもちろん、活字のフォントやサイズなどの書式も装丁の重要な要素です。本展はそんな本の装丁に焦点を当てた展示です。

日本の銅版画の先駆者でもあり青森県の創作版画の祖といわれる今純三の「青森県画譜」をはじめ、県出身版画家、関野準一郎、棟方志功、佐藤米次郎の作品や、阿部合成作で、今官一の直木賞受賞作『壁の花』の表紙絵原画、佐野ぬい作の北畠八穂『北畠八穂児童文学全集』表紙原画などを展示する予定です。

エクステンド常設展示

～常設展示替え

常設展示している13人の作家たちから毎回一人以上をピックアップし、コーナーを拡大して展示する「エクステンド常設展示」。平成29年6月2日(金)からは、同じ年の生まれで、切磋琢磨しあった太宰治と今官一の展示です。12月7日(木)からは、生誕百年を迎える、川島雄三を取り上げます。多数のご来館をお待ちしています。

特別展「青函を旅した文人たち」開催報告

会期 平成28年7月9日(土)

～9月22日(木・祝)

近代の幕開けとともに、日本国内では殖産興業に必要な通信網、交通網の整備が進められました。広大な土地と資源を有する北海道は、近代化を進めていく上でなくてはならない新天地と目されます。北海道と本州を結ぶ青函航路が開かれ、その結節点である青森と函館を多くの人々が往来することになりました。

この特別展は、かつて青函を旅した文人のうち、島崎藤村、石川啄木、河東碧梧桐、宮沢賢治、与謝野鉄幹・晶子夫妻の6人を取り上げ、その旅が青森及び日本の近代文学に及ぼした影響を紹介しようというものでした。

展示の基軸となる解説を、次の方々に執筆していただきました。

・佐藤良宣(青森県立郷土館主任学芸主査)「青函連絡船について―鉄道開業の頃から貨車航送実現まで―」

・竹浪和夫(下北文化社代表)「藤村と津軽海峡」

・西脇巽(国際啄木学会理事)「青函連絡船上の啄木」

・櫛引洋一(弘前市立郷土文学館企画研究専門官)「与謝野寛・晶子、海峡をわたる思い」

・牛崎敏哉(宮沢賢治記念館副館長)「詩「青森挽歌」と宮沢賢治」



・館田勝弘(青森県郷土作家研究会代表理事)「河東碧梧桐の来県と青森県俳壇」

展示資料の内訳は書画一八点、書簡一四点、原稿四点、自筆資料二点、印刷物九点、雑誌二三点、図書六三点で総資料点数は一三三点、総入場者数は四、一八六名でした。

関連イベントは次のとおりでした。

文学講座
・第1回 平成28年7月24日(日) 青森県総合社会教育センター(参加者数51名)

演題:「与謝野寛・晶子、海峡をわたる思い」

講師: 櫛引洋一(弘前市立郷土文学館企画研究専門官)

演題:「石川啄木の青森・函館―浜薔薇の花の香りにいざなわれて―」

講師: 山本玲子(啄木ソムリエ・岩手県文化財保護審議会委員)

・第2回 平成28年8月21日(日) 青

森県総合社会教育センター(参加者数52名)

演題:「津軽海峡を越えた藤村……要吉、雨雀との出会いとその後」

講師: 竹浪和夫(下北文化社代表)

演題:「宮沢賢治・詩「青森挽歌」から童話「銀河鉄道の夜」へ」

講師: 牛崎敏哉(宮沢賢治記念館副館長)

日曜講座
平成28年9月11日(日) 青森県立図書館研修室(参加者数22名)

演題:「青函を旅した文人たちの諸事情」
講師: 伊藤文一(青森県近代文学館室長)

展示概要

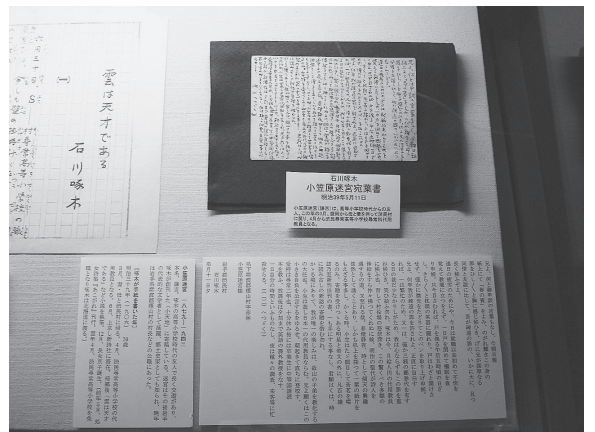
【島崎藤村コーナー】

明治37(一九〇四)年7月、『破戒』の出版資金を立立ててもらったため、島崎藤村は妻の実家のある函館に行きます。連絡船に乗る前、藤村を青森駅で出迎えたのは、後年、口語短歌の草分けとなる鳴海要吉と、戯曲、評論、児童文学等で活躍する秋田雨雀でした。今回、この二人の若者を魅了した藤村の浪漫詩集『若菜集』及びそれに続く詩集『一葉舟』、『夏草』、『落梅集』の初版本を展示しました。また、藤村自身の青函往来をモチーフにした作品「津軽海峡」・「突貫」の初出雑誌、要吉・雨雀と藤村のつながりを示す図書資料を展示しました。

【石川啄木コーナー】

県内には啄木の足跡を伝える碑が複数あり、これらは啄木の歌に魅せられた県出身の歌人・川崎むつをををはじめ、多くの人々の熱意により建立されたものです。啄木が青森の文人、文学に与えた影響には大きなものがあります。

野辺地町の愛宕公園には「潮かをる北の浜辺の／砂山のかの浜薔薇(はまなす)よ／今年も咲けるや」(『一握の砂』)の啄木歌碑があります。同町の常光寺に、父の師であり母の兄である葛原対月(かつらはらたいげつ)が住職としていたことから、啄木は三度野辺地を訪れています。第1回文学講座の講師山本玲子氏は、啄木が次のステップを踏み出す前に「心を整える」重要な時間を過ごした場所が青森だったと述



べています。故郷を追われた啄木を受け入れた函館が特別な地であることは揺るぎませんが、人生の重要な局面を迎えた際に立ち寄り、心を整えた青森の地もまた、啄木にとって重要な地だったと言えましょう。

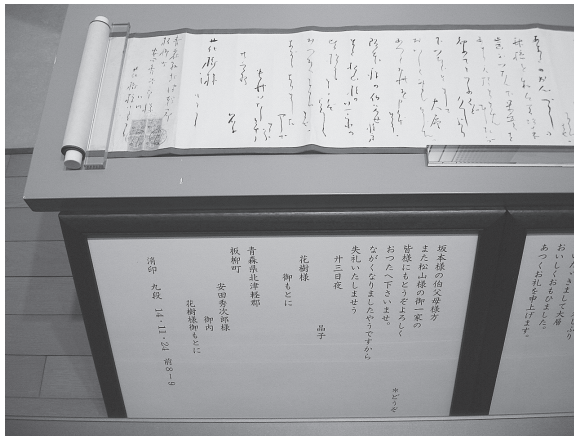
当館で所蔵する啄木書簡の一つ、浜民尋常高等小学校の代用教員になって間もない明治39（一九〇六）年5月、友人宛に出したはがきの中で啄木は、薄給の代用教員という身分を嘆きつつも、郷里の師弟の教育に携わる喜びを綴り、「小生は蓋し日本一の代用教員ならむ（自分はおそらく日本一の代用教員だろう）」と自らの教育に自負をのぞかせています。日本近代文学館から啄木の肉筆原稿「雲は天才である」を借用し併せて展示しましたが、自身の教員生活を題材に書かれた「雲は：」の主人公、代用教員新田（あらた）が、理想に燃えて校長らと衝突する姿は、青年教師啄木の姿を彷彿とさせます。この2資料を多くの方にご覧いただけた意義は大きかったと思います。

【与謝野寛・晶子コーナー】

昭和6（一九三二）年6月、与謝野寛・晶子夫妻は、北海道大学での講演のため、青函連絡船松前丸で青森から函館に渡りました。この時の青森での滞在は短かったのですが、6年前の大正14（一九二五）年9月には、十和田湖に遊ぶとともに、板柳に4日間滞在しています。板柳には、寛が主催する新詩社の同人、安田秀次郎及び松山鉄三郎、

坂本元太郎、工藤大成らがいました。与謝野夫妻は、板柳尋常高等小学校で万葉集、源氏物語の講義を行っています。

今回、初公開資料として晶子の安田花樹宛書簡（大正14年11月24日付）を展示しました。安田花樹は安田秀次郎の娘で明治43年生まれ。「花樹」の名は晶子が名付けたものでした。14歳に成長した花樹に、晶子は板柳で初めて会うことになりました。滞在時あまり話すことができなかったようですが、書簡には「郊外に小さい家が出来てゐましてそこでお泊り下さればいい、とおもひます」と記されています。安田家及び板柳の人々との親密な交流の一端を窺うことができる資料です。



【宮沢賢治コーナー】

賢治が生前出版した唯一の詩集『春と修羅』（大正13（一九二四）年 関根書店

と、「青森挽歌」「オホーツク挽歌」全文の直筆原稿複製（原本は宮沢賢治記念館（花巻市）所蔵を併せて展示しました）。

タイトルに「青森」という語が冠せられた長詩「青森挽歌」は、大正12（一九二三）年の夏、花巻から青森に向かう列車の中で作られました。青森から連絡船で函館にわたった賢治は、列車で稚内へ行き、そこから連絡線で樺太へ渡りました。花巻農学校生徒の就職依頼を目的としたこの旅は、前年に亡くなった最愛の妹トシの魂を探し求める旅でもあったのです。悲しみに満ちたこの旅から「青森挽歌」「オホーツク挽歌」といった挽歌群が生まれ、『銀河鉄道の夜』が構想されることになったのです。

【河東碧梧桐コーナー】

明治35（一九〇二）年に正岡子規が死去した後、新聞「日本」の俳句欄を引き継いだのは河東碧梧桐でした。碧梧桐は、子規の志を引き継ぐとともに、従来の形式にとらわれない独自の俳句創作を推し進めていきます。39（一九〇六）年8月、碧梧桐は、進むべき俳句の道を探るべく全国を巡る「三千里」の旅に出ました。

青森県には、39年の年末から40年2月まで滞在し、碧梧桐の行く先々に県内の俳人達が集まり句会が開かれました。その後、函館に渡って道内を巡遊すると、同年5月に再び青森に戻り、1月余りを過ごします。碧梧桐の計3か月超に及ぶ本県滞在は、碧梧桐提唱

の新傾向俳句を県俳壇に深く浸透させる事となりました。

今回、碧梧桐に関する資料として、『三千里』（明治43（一九一〇）年 金尾文淵堂）をはじめとする著書のほか、直筆の短冊4葉を展示しました。六朝書を範にした碧梧桐独特の書体は、浅虫温泉での冬籠り中に会得したものだと思います。

今回6人の文人たちの青函往来を取り上げたわけですが、北海道開拓、通信、交通インフラの整備といった近代化の波が、文人たちの青函の旅を促し、青森の文学に大きな影響を与えたことが見えてきます。

しかし、交通網がどんなに整備されたとしても、訪れた人の心を動かす何かが青森になかったならば、やはり青森は通り過ぎるだけの場所になっていたはず。近代化に促され、海峡を往来した文人たちが、青森に足を止めた大きな要因として、青森人の文学に対する思いの強さに心を動かされたことがあったように思われます。

平成28年3月、北海道新幹線が開通し、青函ひいては本州と北海道の関係性に新たな展開が生じ始めていますが、この変化により青森の文学は、今後どのような様相を見せることになるのでしょうか。

（青森県近代文学館室長 伊藤文二）

三上強二寄贈資料展開催報告

平成28年4月29日(金・祝)
～5月25日(水)



4月29日(金・祝)から5月25日(水)まで、「三上強二寄贈資料展」津軽の碩学が残したものを開催しました。戦後、約30年にわたり、青森県立図書館に勤務し、多くの文化人と交流した三上強二氏(一九二八―二〇一五、青森市出身)は、青森県文化の語り部として知られた、まさに碩学(せきがく)：広く深い学問を修めた人)と呼ぶにふさわしい人物でした。

三上氏は諸文人の思い出を随想「訪庵庵雑記」(平成元年から翌年まで「東奥日報」に連載)に綴っています。同様のエッセイは、晩年に会長を務めた青森ペンクラブの会誌「北の邊」にも見られます。本展では、それらのエッセイをパネル化し、三上氏が生前に寄贈くださった広範な文学資料と組み合わせてご紹介しました。その結果、パネルには、秋田雨雀、吉川英治、江渡狄嶺、津軽照子、市田とよ、加藤謙

一、倉光俊夫、竹久虹之助、馬場のぼる、鈴木喜代春ら名だたる文人が登場し、展示ケースには諸文人の著書はもとより、書簡や書画が多数並びました。

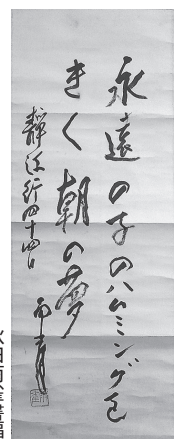
このほか、黒石市出身の拓本研究家、工藤四代治の手による文学碑拓本のコーナーや本県を舞台としたミステリー51冊のゾーンを設けることができました。青森県の文化の継承と発展に寄与した三上氏の足跡について紹介するとともに、本県にまつわる文学の多様な面に光を当てることができましたように思います。総資料点数は二〇三点、会期中に一四二七人の方が足を運んでくださいました。5月15日に開催した日曜講座「故・三上強二氏のエッセイを読む」には、30名の方にご参加いただきました。

【展示資料紹介】

秋田雨雀書幅「永遠の子のハミングをきく朝の夢」

秋田雨雀は昭和19(一九四四)年に孫娘の静江を伴い郷里の黒石に疎開し、昭和20年から23年までを青森市で過ごしました。当時、造道小学校に勤務していた三上氏は静江を受け持ち、PTA会長に就任した雨雀と対話する機会を多く持つことができたといえます。雨雀はその後上京し、舞台芸術学院長を務めますが、昭和34年には静江が失踪し、十和田山中で亡くなるという出来事に直面します。三上氏旧蔵の書「永遠の子のハミングをきく朝の夢」は雨雀が静江を思って揮毫したもので、

句の左には「静江行四十四日」と記されています。



秋田雨雀書幅

三上強二宛馬場のぼる封書

(平成8年11月7日)

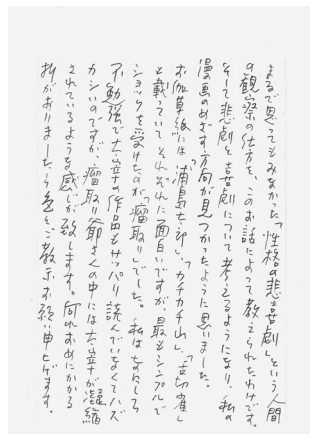
三上氏は、三戸町出身の漫画家、馬場のぼるとは30年来の友人でした。平成3年12月1日には三戸町立図書館を会場に「漫画・マンガ・絵本」の演題で対談を行ったこともあります。三上氏宛の馬場のぼる書簡は計11点を展示しましたが、中でも平成8年11月7日付の封書には、太宰治著『お伽草紙』中の「瘤取り」に関する記述が見られます。同書簡から馬場のぼるが太宰文学から影響を受けていたことが如実に窺える部分を抜粋します。

ともあれ、瘤取りのお話は私が若い頃に最も感銘をおぼえた作品でありました。それまで私がまるで思ってもみなかった「性格の悲喜劇」という人間の観察の仕方を、このお話によって教えられたわけです。そして悲劇と喜劇について考えるようになり、私の漫画のめざす方向が見つかったように思いました。

お伽草紙には「浦島太郎」、「カチカチ山」、「舌切雀」も載っていて

それぞれに面白いですが、最もシンプルでショックを受けたのが「瘤取り」でした。私はなにしろ不勉強で太宰の作品もサッパリ読んでいなくてハズカしいのですが、瘤取り爺さんの中には太宰が凝縮されているような感じが致します。何れおめにかかる折がありましたら色々ご教示お願い申し上げます。

(竹浪直人、文学専門主査)



馬場のぼる封書(平成8年11月7日)

資料集第十輯刊行

資料集第十輯として新たに『太宰治・明治高等小学校時代の学習ノート二種「豫習用讀方帖」「入学試験 運算」』を刊行しました。両ノートは故津島美知子氏、津島園子氏より寄贈いただいたものです。今回の資料集刊行にあたり、全集翻刻部分以外のページもご紹介したく、全ページ写真版で収録いたしました。

巻末の解説は山口徹氏(相模女子大学教授)によるものです。

青森県近代文学館出張展「北村小松」開催報告

会期 平成28年11月14日(月)

～23日(水・祝)



11日間の日程で、当館初の出張展「北村小松」を、八戸市にあるデリー東北ホールで開催しました。本展は、普段なかなか当館にお越しいただくことができない県南地域の皆様に展示を見ていただきたいと企画し、デリー東北新聞社との共催で実現したもので、会期中四五〇人余りの方に足を運んでいただきました。

北村小松は明治34(一九〇二)年、八戸町(現・八戸市)長横町に生まれました。県立八戸中学校で学んだ後、大正8(一九一九)年に慶應義塾大学予科に入学。慶應在学中から小山内薫に師事して新劇を学び、英文科を卒業後は松竹蒲田撮影所に入社して映画シナリオを手掛けました。一方で戯曲を執筆。昭和2(一九二七)年春には、第一戯曲集『猿から貰った柿の種』を刊行しました。昭和6(一九三二)年、日本初の本格的トーキー映画となった「マダムと女房」では原作・脚本を担当。映画

脚本家として不動の地位を築くこととなりました。

小説では、昭和7(一九三二)年「東京日日新聞」に小説「限りなき鋪道」を連載。また、昭和12(一九三七)年には翻訳小説『タバコ・ロード』で米国の作家コールドウェルを日本でいち早く紹介するなど、多方面で活躍しました。

戦時中には、報道班員として南方諸島への従軍を経験。「燃ゆる大空」等の小説により、戦後二年にわたり公職追放を受けましたが、この間SFや怪奇小説に健筆を振るい、追放解除後はユーモア小説を多く書きました。

昭和30(一九五五)年には日本映画界の草創期の姿を描いた実録長編小説『銀幕』を発表。昭和33(一九五八)年には八戸高校の、昭和36(一九六二)年には八戸電波工業高校(現在の八戸工業大学第一高校)の校歌を作詞しました。約80冊に及ぶ著書を世に送り出し、

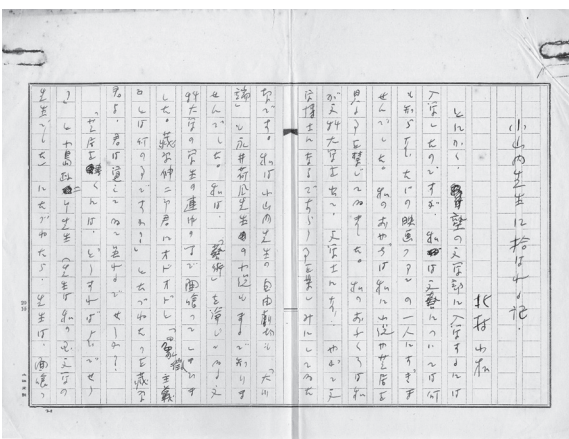


昭和39(一九六四)年、63歳でこの世を去りました。本展は、直筆資料のほか著書や作品掲載誌、遺品などを展示し、八戸が生んだ北村小松の多彩な魅力に迫りました。

また、竹浪直人(当館文学専門主査)による公開講座「北村小松を知る七つのキーワード」や、滝尻善英氏(県文化財保護協会副会長)の講演にも多数お越しいただきました。来場記念品の「ぶた号ペーパークラフト」(デリー東北新聞社デザイン制作)も大好評でした。

【展示品紹介】

◆草稿「小山内先生に拾はれる記」(初公開) 文祥堂製の20×20原稿用紙8枚に黒ペン書き。小松が小山内薫と出会ったきっかけから、いかに先生に育てられたかを小山内の死後回想している随想。



草稿「小山内先生に拾はれる記」

◆慶應義塾大学時代の英文レポート「SHAKESPEARE AND I」

小松は「天才と家庭とこやしの話」というエッセイ(「新潮」昭和3年7月号掲載)で、「シエクスピアのハムレットの論文かなにか書かされた時」「ハムレットなんかよりハムエッグスの方が今の私にとっては有難い」などと書いて、英国人の教師にひどく叱られたことがあったと回想しています。

◆「火上巻」(昭和17年7月23日 東京日日新聞社刊)「火下巻」(昭和17年10月28日 東京日日新聞社刊)

「火」は「少国民新聞」(現・「毎日小学生新聞」)に昭和16年1月1日から1年間にわたり連載された、少年向けの冒険小説です。単行本刊行時に「少年科学小説」のフレイズが冠せられた原子爆弾の話題が登場する作品で、リアルタイムの読者だった小松左京が、数年後に投下され現実となった際の驚きを繰り返して語ったことから、SFファンの間で今日伝説的な存在となっている作品です。実物を目にすることが困難な稀覯本としても名高いものです。(西谷ともえ、文学専門主幹・副室長)

ぶた号ペーパークラフト
デリー東北新聞社製作

エクステンド常設展示「石坂洋次郎と太宰治」開催報告

会期 平成28年6月3日(金)

11月23日(水・祝)

常設展を企画化しようと始めた「エクステンド常設展示」の第三弾では石坂洋次郎と太宰治を取り上げました。昭和61(一九八六)年に86歳で亡くなった石坂洋次郎は平成28年が没後30年にあたります。

昭和22(一九四七)年の石坂の新聞小説「青い山脈」は明るい男女交際のあり方や民主主義がテーマとなっており、まさに戦後の幕開けとして広く国民の支持を得ました。五度映画化されたことに加え、テレビやラジオの番組にもなりました。主題歌は70年近くもの長年にわたって世代を問わず支持され続けています。同じ頃、太宰の小説「斜陽」がベストセラーになります。

生家の没落の様子等をモデルにし、太田静子の日記を参考に書いた小説です。その後まもなく、人気作家となった太宰は亡くなります。一方で、石坂は「百万人の作家」と呼ばれるようになります。次々とヒット作を生みだします。同時代に活躍したふたりですが、当時の文壇の「陽」の部分を石坂が、「陰」の部分を太宰が担い、まさに、日本の文壇の人氣を二分したといえます。今回の展示では、二人の新聞小説や、俳句、中学時代の作品などを読み比べできるように展示しました。

石坂洋次郎の特設コーナーとして、

映画「石中先生行状記」津軽ロケ時のスタッフのサイン色紙や、石坂の草稿「いまから三十年も前のことだが…」などを展示しました。

太宰治の特設コーナーとして、明治高等小学校時代の二冊の学習ノート「豫習用讀方帖」「入学試験 運算」を展示。また、「豫習用讀方帖」を添削した傍島正守(そばじまさもり)先生の日記をご遺族からお借りして展示しました。中学受験の時の太宰を一番近くで見て来た、傍島の日記は本邦初公開でした。傍島は太宰の姉ふみの夫でもありました。二人の結婚記念写真も併せてお借りして展示しました。太宰が青森受験の際宿泊したとされる山六旅館の写真や当時の地図は、青森市まちかど歴史の庵「奏海」の会様より提供を受けました。ご協力くださった皆様に心より感謝申し上げます。



第15回青森県近代文学館川柳大会開催

3月5日(日)、第15回青森県近代文学館川柳大会を県立図書館集会所で開催いたしました。今回の宿題は「空」「ゆらゆら」「ロボット」「意外」、当日

発表の席題は「成田千空の背広」でした。野沢省悟氏の講演「作句の秘訣」、柳誌の展示・交換会も行われ、参加者102名を数える例年以上の盛会となりました。

席題「成田千空の背広」徳田ひろ子選
わしや昔モボと呼ばれておったんじや

席題「成田千空の背広」稲見則彦選
青空の広さを語るボタン穴

席題「空」村井規子選
成田我楽

色即是空人は真水に還ります
森 雄岳

席題「空」柳谷たかお選
弟子にしてください雲に土下座する

綿菓子になるまで揺れているピアス
井上健蔵

宿題「ゆらゆら」菊池京選
野沢省悟

宿題「ゆらゆら」佐藤俊一選
「ボクだけじゃないもん」こらっ！石原クン

宿題「ロボット」北山まみどり選
船水 葉

ロボットにほどよい風をプログラム
吉田吹喜

宿題「ロボット」月波与生選
立ち上がる日へガンダムの組立図

宿題「意外」守田啓子選
三浦蒼鬼

生きること死ぬこと足首の深さ
菊池 京

宿題「意外」濱山哲也選
ゆるキャラを脱いでネクタイして帰る

吉田吹喜

全国文学館協議会共同展示

会期 平成29年3月1日～3月31日

平成23年3月11日の東日本大震災という未曾有の大災害を直視し、記憶に止め、震災で命を失った人々に対する鎮魂と哀悼、被災者への慰謝とコミュニケーションの復興を願う心から、全国文学館協議会加盟各館がそれぞれの持ち味を活かし、平成25年から毎年3月に一斉開催している共同展示「3・11文学館からのメッセージ」展。今回で5回目の開催となります。

今年度は、平成28年2月に逝去した津島佑子の創作の道のりを振り返るとともに、東日本大震災を受けて書かれた「ヤマネコ・ドーム」(平成25年)に焦点を当て、「追悼・津島佑子ー3.11と『ヤマネコ・ドーム』」と銘打ち、作品に込められた津島の思いを紹介するパネル展を開催します。

津島氏は、昭和22年、東京都三鷹に太宰治の次女として生まれました。白百合女子大学文学部英文科在学中の41年に同人誌「文藝首都」の会員となり、46年に第一作品集『謝肉祭』を刊行、47年には「狐を孕む」が芥川賞候補となつて注目されます。その活躍はめざましく、51年『律の家』で第16回田村俊子賞を受賞したのを皮切りに、53年『寵児』で第17回女流文学賞、54年『光の領分』で第1回野間文芸新人賞、58年『黙市』で第10回川端康成文学賞、62年『夜の光に追われて』で38回読売文学賞、63年『真昼へ』で第17回平林

たい子文学賞、平成10年『火の山―山猿記』で第34回谷崎潤一郎賞、第51回野間文芸賞を受賞するなど、数々の名だたる文学賞を受賞しました。また、作品は海外にも紹介され、国際的にも高く評価されています。

平成25年に発表された「ヤマネコ・ドーム」は、東日本大震災に伴う原子力発電所の事故を、アメリカ兵と日本人女性との間に生まれた孤児たちの視点を通し、戦後日本が背負った歴史と重ねて描き出した作品でした。作家の堀江敏幸は、津島の追悼文「その意味を」(「群像」平成28年4月号)で、津島が「効率と利潤の追い求め、都合の悪いことには蓋をしようとする忘却病によってコンクリートのドームに覆われてしまった島国の現状に、最後まで異を唱えつづけた」と述べています。

津島氏には、平成21年度開催の青森県近代文学館「太宰治生誕100年特別展」において多大なるご協力をいただきました。感謝の思いとともに、『ヤマネコ・ドーム』に込められた津島氏の思いを多くの方にお伝えできたらと思います。

日曜午後の朗読会〜おとなのためのものがたり

今年度の朗読会は短編作品を中心に選び、全11回、のべ94名の方にご参加いただきました。春から新たな解説員1名が配属となり2名の解説員が交替で担当しました。



朗読会

- ① 4月10日 「鈴木喜代春」〜『白い河』
- ② 5月1日 「葛西善蔵」〜『子をつれて』
- ③ 6月5日 「太宰治①」〜『人間失格』
- ④ 7月10日 「太宰治②」〜『皮膚と心』
- ⑤ 7月31日 「白木茂(訳)」〜『ハーン作「耳なし芳一」の話』
- ⑥ 8月7日 「石坂洋次郎」〜『婦人靴』
- ⑦ 8月28日 「秋田雨雀」〜『白鳥の国』より
- ⑧ 9月18日 「三浦哲郎」〜『帰郷』
- ⑨ 10月23日 「今官一」〜『海の百合』
- ⑩ 11月20日 「北島八穂」〜『すきまからきたキリスト』
- ⑪ 12月25日 「佐藤紅緑」〜『あん火』

パネル展開催

新たに「青函を旅した文人たち」「梅内美華子・珠玉の短歌」「児童文学者・鈴木喜代春」の3パネルを製作し、地域の施設・学校・諸団体等の協力を得て開催いたしました。会場・期間は次のとおりです。

- ◇「梅内美華子・珠玉の短歌」パネル展
横浜町ふれあいセンター・横浜小・中学校 4月7日(木)〜6月8日(水)
- ◇「太宰治生誕100年」パネル展
ふかうら文学館
5月21日(土)〜6月19日(日)
- 伊藤忠吉記念図書館
10月17日(月)〜10月23日(日)
- ◇「寺山修司没後30年」パネル展
横浜町ふれあいセンター
5月6日(金)〜6月8日(水)
- 青森県立青森北高等学校
7月15日(金)〜7月17日(日)
- 青森県立岩木高等学校
7月21日(木)〜7月26日(火)
- 横浜町ふれあいセンター・横浜中学校
12月21日(水)〜2月15日(水)
- ◇「太宰治」パネル展
伊藤忠吉記念図書館
6月1日(水)〜6月30日(木)
- ◇「高木彬光―ミステリーの魔術師」パネル展
横浜町ふれあいセンター
6月13日(月)〜7月15日(金)
- ◇「詩人・村次郎展」パネル展
青森県立八戸高等学校
7月15日(金)〜7月17日(日)
- 八戸市立図書館
10月26日(水)〜10月30日(日)
- ◇「三浦哲郎」パネル展
青森県立三沢高等学校
7月15日(金)〜7月17日(日)
- ◇「青森の文学者たちの戦前・戦中」パネル展
横浜町ふれあいセンター
7月28日(木)〜8月30日(火)
- ◇「大塚甲山没後100年展」パネル展
ふかうら文学館
8月11日(木)〜9月19日(月)
- 横浜町ふれあいセンター
10月25日(火)〜12月19日(月)
- ◇「児童文学者・鈴木喜代春」パネル展
田舎館村役場
8月22日(月)〜9月15日(木)
- 青森市民図書館
9月21日(水)〜9月29日(木)
- 県総合社会教育センター10月2日(日)
- ◇「西北五文学散歩」パネル展
青森県立中里高等学校
10月15日(土)〜10月16日(日)
- 県総合社会教育センター11月15日(日)
- ◇「青函を旅した文人たち」パネル展
青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸
10月8日(土)〜10月9日(日)
- 青森県立黒石高等学校
11月7日(月)〜11月11日(金)
- 青森県立木造高等学校
11月15日(火)〜11月22日(火)
- 青森県立青森高等学校
12月19日(日)〜1月20日(金)
- ◇「大町桂月が描いた青森」パネル展
横浜町ふれあいセンター
9月9日(金)〜10月9日(日)

エクステンド常設展示「佐藤紅緑と福士幸次郎」開催報告

会期 平成28年12月22日(木)

～平成29年5月28日(日)～

「エクステンド常設展示」第四弾では「師友の系譜」というサブタイトルのもとに、佐藤紅緑と福士幸次郎を取り上げました。

佐藤紅緑は、明治7年に弘前の親方町で生まれ、明治26年には青森県尋常中学校を中退し上京。同郷人で日本新聞社の社主である陸羯南の書生となりました。翌年には日本新聞社に入社し、同僚となった正岡子規から俳句を学びます。紅緑の号は本名である治六(ころく)をもじって子規が付けてくれたものでした。俳人、劇作家、小説家といった、その後の多岐にわたる活躍の原点には、羯南や子規との運命的な出会いがありました。

一方、明治22年に弘前市本町で生まれた福士幸次郎は、明治41年に佐藤紅緑の書生となりました。大正3年に第一詩集『太陽の子』を刊行。大正6年には、紅緑から勘当された長男・八郎(後のサトウ・ハチロー)に同行して、小笠原諸島の父島で共同生活を送りました。大正12年の関東大震災後は津軽に帰り、昭和2年に再上京するまでの間、若き日の今官一や高木恭造らに影響を与えました。

本展では紅緑、幸次郎の書画のほか、以下のような資料を紹介し、青森県出身の文学者を軸とした人間関係の重厚

さに迫りました。

・「陸羯南会誌」第5号(平成27年3月発行)※佐藤紅緑「陸羯南先生」銘肝私記」掲載

・「木兎」第2巻第9号(明治35年10月発行)※佐藤紅緑「子規翁終焉後記」掲載

・「早稲田文学」第51号(明治43年2月発行)※幸次郎の日記が元になったといわれる秋田雨雀の小説「少年とピストル」掲載

・サトウ・ハチロー『昨日も今日も明日も』(昭和22年、草原書房刊)※「福士先生逸話集」掲載

・「わらはど」創刊号(大正14年5月発行)※東奥義塾に赴任した幸次郎の指導のもと、今官一らが発行したガリ版刷りの雑誌

・「甲田の裾」第30巻第2号(昭和34年2月発行)※一戸謙三「福士幸次郎の詩(終回)」掲載

・高木恭造『定本まるめろ』(昭和37年、青柳書店刊)※「福士幸次郎の思い出」掲載

このほか、オープンから1か月のみの期間限定で、紅緑が幸次郎に宛てた書簡2通(昭和20年3月13日封書と年不明7月5日はがき)を初公開しました。紅緑と幸次郎が強い情愛で結ばれていたことを物語る新資料でした。

わらはど

福士幸次郎短冊「雪け沼たゞよふ八橋の枯枝か」



「わらはど」創刊号表紙

青森県俳句懇話会寄贈資料展

会期 平成29年2月25日(土)

～5月24日(水)～

平成28年3月25日、青森県俳句懇話会の徳才子青良会長と草野力丸事務局長がご来館され、懇話会会員から収集した書画、原稿、書籍等636点の寄贈を受けました。本展ではそれらのうち選りすぐりの99点を展示するとともに、全色紙、短冊509点の画像をプロジェクトで映し出しています。

2月25日(土)、俳句関係者・報道関係者の見守る中、徳才子会長、草野事務局長、パネル原稿を執筆くださった小野いるま氏、芋田県立図書館副館長のテープカットで幕を開けました。展示構成は次の通りです。

- ・県俳句懇話会のあゆみ
- ・正岡子規
- ・高浜虚子
- ・虚子門(ホトトギスの4S・増田手古奈)
- ・「石楠」(大野林火・佐藤流葉)
- ・角川俳句賞

- ・成田千空(師草田男・件の会)
- ・金子兜太
- ・船水以南(船水清)
- ・竹内俊吉
- ・青森を旅した俳人(加藤楸邨)
- ・県俳壇のながれ(八戸俳諧倶楽部・「寂光」「十和田」)

本展を通じて、青森県俳壇がいかに中央俳壇と密接にかかわって発展してきたかということも改めて感じることができると思います。今回は当館でなかなかご紹介する機会に恵まれない中央の俳人たちの作品も多数展示しています。この機会にぜひ足をお運びください。

今年は県俳壇に大きな足跡を残した増田手古奈、成田千空のそれぞれ生誕120年、没後10年にあたります。成田千空研究会のご協力を得て記念イベントを開催します。こちらにもぜひご参加ください。

5月21日(日)13時30分～15時朗読会&千空没後10年記念イベント解説員による朗読「寺山修司と千空」千空研究会メンバーのお話



資料寄贈者紹介

次の方々から資料を寄贈していただきました。誠にありがとうございました。今後とも当館へのご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

今期のご寄贈(平成28年1月～12月)

- 会津哲男―中村草田男色紙額他特殊資料一点
- 青嶺俳句会―『句集 円周率』二冊
- 青森アララギ会―『歌集 八十年 青森アララギ叢書第三十篇』他図書一冊
- 青森県―『青森県史 資料編 近現代7』
- 青森県高等学校文化連盟―『高文連紀要』第37号
- 青森県退職高等学校校長会さつき会―『さつき会たより』第32号 二冊
- 青森県立美術館―『森羅万象棟方志功とその時代展』二冊
- 青森市川柳連盟―『第52回青森市民文化祭 川柳大会』二冊
- あおもり草子編集部―『あおもり草子』第二三五号 他雑誌一冊
- 青森文芸出版―『千空句帖』他図書一冊・雑誌五冊
- 青柳隼人―『文芸あおもり』第一三六号 他雑誌三十五冊
- あきは書館―『季刊 コア共和国』Vol.20
- 尼崎市総合文化センター―『文芸作品集』
- 新谷ひろし―『新谷徳子遺句集『春光』』
- 飯田知克―『俳句集 秋茄子Ⅱ』二冊
- 泉正彦―『第26回青森県民文化祭文芸コンクール入選作品集2016』二冊
- 一戸晃―『詩人 一戸謙三の軌跡 第一集』
- 一戸れい―『第五集 思い出―ありし日をしたのびて』二冊
- 一茶記念館―『小林一茶百九十回忌 全国俳句大会作品集』
- 伊藤愛理―『波止場』52 他雑誌三十冊
- 井上直哉―『小学三年生』(5―1) 他雑誌十三冊
- いわき市立草野心平記念文学館―『星新一・星一展』他図書一冊
- 岩手県立図書館―『展示資料目録 第32回啄木資料展』
- 梅内美華子―『真珠層』
- 姥名忠蔵―『羽州街道と新城・岡町地域』二冊
- 愛媛県企画振興部地域振興局 文化・スポーツ振興課―『愛媛感動ものがたり』800字の感動を愛媛から』
- 大庭れいじ―『合同歌集 希望の河』他特殊資料七点
- 小笠原茂介―『午前』第10号 他雑誌二冊
- かごしま近代文学館―『島尾敏雄特別資料目録』
- 風詩社―詩誌『風』第18号 二冊
- 神奈川文学振興会―『安岡章太郎展』他図書二冊
- 金木太幸会―会誌『馬禿』第十八集
- 鎌倉文学館―『特別展 ビブリア古書堂の事件手帖』他図書三冊
- 「神津恭介ファンクラブ」事務局―『らんだの城通信』第56号 他雑誌四冊
- 河出書房新社―『夢見る教材』
- 北九州市立松本清張記念館―『世界文学と清張文学』
- 城戸和子―『旅籠』他図書二冊
- 城戸幸次郎―『明新会報』第63号
- 木村美映―『美映』通巻12号 他雑誌十冊・特殊資料一点
- 木村友祐―『ほんほん蒸気』第2号
- くまもと文学・歴史館―『くまもと文学・歴史館開館 及び 熊本近代文学館30周年記念誌』
- クリエイションギャラリーG8―『30年30話 クリエイター 30組の対話によるデザイン』の過去・現在・未来』
- 黒石文学会―『ことばの森』第九号
- 群馬県立土屋文明記念文学館―『歌の古代を探る』他図書三冊
- 小岩尚好―『パンドラの匣』
- 講談社―『日本おとば絵画史 たのしい日本美術』
- 河野実―『川西英と川上澄生』他雑誌一冊
- 五所川原俳句会―『県下俳句大会入選句集』
- 小林慎―『トクマノベルズ大活字マガジン』
- さいたま文学館―『平将門』他図書二冊
- 齋藤光子―『第九回北九州文学協会文学賞作品集 ひびき』
- 境佳子―『fabriable』
- 桜庭和浩―『DANCO DE SKELETON』
- 佐々木達司―『春秋』(1―4) 他特殊資料一〇〇点
- さわらび短歌会―『さわらび』第2号 二冊
- 此岸俳句会―『此岸 合同句集』
- 静岡市観光交流文化局文化振興課―『顕彰誌「緑の作家中勘助」』
- 七戸中央図書館―『繋』
- 嶋祐三―『青森文学新聞』No.35 他雑誌一冊
- 清水博司―『二〇世紀文学としての「プロレタリア文学」』
- 清水義和―『寺山修司研究』第九号 他図書一冊
- 渋柿園俳句会―『渋柿園 合同句集(五百号記念)』
- 昭和館―『昭和のくらし研究』第14号
- 詩霊の会―『詩霊(3―1)』他雑誌一冊
- 神竜人―増田手古奈関係資料三点
- 杉野千代子―『杉野草兵句集 海に雪降る』
- 世田谷文学館―『文芸せたがや』第33号 他図書一冊
- 節のふるさと文化づくり協議会―『土のふるさと 第18回塚郷節文学賞入選作品集』
- 仙台文学館―『井上ひさしの江戸』他図書一冊
- 川柳触光舎―『高田寄生木賞入選作品集』
- 川柳ゼミ 青い実の会―『たわわⅢ』二冊 他雑誌三冊
- 相馬信吉―青森市地図の復刻版 他特殊資料一点
- 外ヶ浜議会―『議会だより そとがはま』第44号
- 高木晶子―『呪縛の家』他図書二六冊・雑誌二十冊・特殊資料一点
- 高木保―『演劇講話のタベ 青森県の戦後の演劇』
- 高澤光雄―『知と愛』他図書八冊
- 高瀬朋子―『吉行淳之介軽薄対談』他図書
- 高橋玖美子―『詩を問い続けて―私的詩論集』
- 高橋憲三―『地球よりも青く』
- 高梁比庵会―『第八回清水比庵大賞』短歌の部』入賞作品集』
- たかなな発行所―『句集 星辰』
- 滝尻善英―青森県近代文学館出張展「北村小松」講演レジメ「八戸が生んだモボ・北村小松」
- 蟹の会―『蟹』第60号
- 短歌結社「草の会」―平成二十七年度歌会詠草集「陽だまり」二冊
- 沖積舎―『伊丹公子全詩集』他図書三冊
- 潮音社―『歌集 花野』
- 調布市武者小路実篤記念館―『伝記ものの世界』他図書一冊
- 津島園子―太宰治文学碑(蟹田・観瀾山)写真
- 東奥日報社―『東奥文芸叢書』十七冊
- 藤樹社―『書道界』通巻321号
- 遠瀬信子―『歌集 着信光』二冊
- 徳島県立文学書道館―『寂聴対談展』他図書二冊
- 飛内文代―『ミステリ読者のための連城三紀彦全作品ガイド 増補改訂版』他雑誌二冊
- 永倉奈々美―『地獄篇』他図書七冊
- 長崎市遠藤周作文学館―『遠藤周作「沈黙」と長崎』
- 中原中也記念館―『adv』第97号 他図書二冊
- 中村キネ―『流』No.8号 二冊
- 奈良岡功三―NHKラジオ教養特集「文壇よもやま話」録音テープ
- 仁科源一―『風の軌跡 村次郎の生涯』他図書一冊
- 西谷是空―『さじ鳩』通巻第224号 他雑誌十三冊
- 日本歌人クラブ―『2016年版 現代万葉集』
- 日本近代文学館―『近代文学の一五〇年―夏目漱石、芥川龍之介から戦後作家まで―』
- 日本現代詩歌文学館―『塚本邦雄展』他図書三冊
- 野沢省悟―『文芸あおもり』第一五二号 他雑誌三冊・特殊資料一点
- 畑中徹―『下北歳時記』
- 八戸市博物館―『研究紀要』第30号 他図書

三冊

- 八戸市民新聞社―「ふぁみりい」八部
- 波止場の会―「波止場」105二冊
- 花田浩二―「宮沢賢治と津軽」in弘前実施報告書
- 林よしー淡谷悠蔵色紙「一座一会」他特殊資料七点
- 帆風美術館―「開館八周年企画展 江戸時代バードウォッチング」
- 姫路文学館―「姫路文学館ガイドブック」
- 平野敏―「詩集 エスキス」他図書二十七冊 雑誌一〇四冊
- 弘前学院大学地域総合文化研究所―「地域学」十二巻
- 弘前市立郷土文学館―「第40回企画展 福士幸次郎展」
- 弘前文芸協会―「文芸弘前」第27号二冊
- フィグインク―「太宰治100の言葉」
- 福岡市文学館―「POLYPHONY 多くの音 / 声の饗宴」福岡の詩1945・1965」
- 福士輝子―「日韓文学シンポジウムin青森」
- ふくやま文学館―「福山の文学 第17集」他図書一冊
- 藤代健生病院―「藤代健生病院四十周年記念誌」
- 文京区立森鷗外記念館―「谷根千、寄り道、文学散歩」他図書一冊
- 北狄社―「泣面山に雨」
- 北海道立文学館―「『さとぼろ』発見」他図書二冊
- 北方新社―「歌集鳥」
- 前橋文学館―「パノラマ・ジオラマ・グロテスク」他図書一冊
- 牧ひろし―「河口」No.42
- 松丘保養園松桜会―「成瀬豊画文集」二冊
- 松山市立子規記念博物館―「子規の夏休み」他図書一冊
- 松山芳生―「川柳一句集 百花繚乱」二冊・特殊資料一点
- 三上昌宏―八人会「落穂」第一号・第二号 コピー
- 南勉―「歌集 愚省抄」他雑誌四冊
- 宮本和典―「阪急不動産オーナーズ倶楽部会報誌」Vol.24
- 陸奥新報社―「陸奥新報」日刊 第

24558号二部

- 棟方志功記念館―「棟方志功記念館 40年のあゆみ」
- 無名群社―「無名群」94号二冊
- 村井村治―石田實宛北村小松書簡コピー五点
- 明治図書出版―「よくわかる国語の学習2」
- 山梨県立文学館―「企画展 北杜夫展」
- やまなし文学賞実行委員会事務局―第24回やまなし文学賞小説部門受賞作「彩りの郷にて」
- 山本玲子―「握の砂」他図書十五冊
- 吉崎光一―「二〇一六年版県詩集 青森」
- 吉田徳壽―「安藤昌益の痛快漢字解」他雑誌七冊
- 吉田槇子―「慧相」(2―)他雑誌九冊
- 會津八一記念館―「雁魚來往四」
- 青嶺俳句会―「青嶺」
- 青森アララギ会―「青森アララギ」
- 青森県歌人懇話会―「青森県歌集」
- 青森県教育厚生会―「三潮」
- 青森県現代俳句協会―「青森県現代俳句年鑑」
- 青森県川柳社―「ねぶた」
- 青森県俳句懇話会―「新青森県句集」
- 青森古今短歌会―「青森古今」
- 青森文学会―「青森文学」
- 青森ペンクラブ―「北の邊」
- 井上康―「みちのく春秋」
- 井上靖記念文化財団―「伝書鳩」
- 井上靖研究会―「井上靖研究」
- 小笠原茂介―「第三次ERA」
- 大佛次郎記念館―「おさらぎ選書」
- 小田桐優子―「俳句鼎妙」
- 小山正見―「感泣亭秋報」
- 海光発行所―同人誌「海光」
- 師画の会―「師画」
- 金沢文化振興財団―「研究紀要」
- 北九州市立松本清張記念館―「松本清張研究 第十七号」
- 北の街社―「北の街」
- 木村美映―季刊「美映」

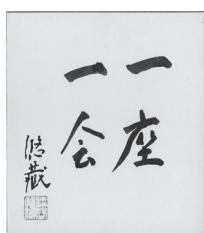
と読書

- 陸羯南会―「陸羯南会誌」
- 黒艦隊―「俳句同人誌 黒艦隊」
- 群系の会―「群系」
- 薫風発行所―「薫風」
- 群馬県立土屋文明記念文学館―「群馬県立土屋文明記念文学館 紀要」
- 勁草社―「勁草」
- 月刊弘前編集室―「月刊「弘前」」
- 越谷市立図書館 野口富士男文庫―「野口富士男文庫 第十八号」
- 五所川原俳句会―「五所川原俳句会会報」
- 小山弘明―「光太郎資料」
- 斎藤茂吉記念館―「斎藤茂吉記念歌集 第四十二集」
- 此岸俳句会―俳誌「此岸」季刊誌 此岸」
- 紫明の会―「紫明」
- 下北文化社―「下北文化」
- 渋柿園俳句会―「渋柿園」
- 書肆 北奥舎―「北奥氣園」
- 真朱の会―「真朱」
- 雪天俳句会―「雪天句集 第10集」
- 全国文学館協議会―「全国文学館協議会紀要」
- 川柳「風の会」―「風紋」
- 川柳触光舎―「触光」
- 川柳ゼミ 青い実の会―「青い実」
- 川柳塔みちのく―「川柳塔みちのく」
- 川柳ひらなひ吟社―「川柳ひらなひ」
- 外海吟社―「外海」
- 泰斗舎―「あおり芸術鑑賞友の会文化情報誌 びーち」
- 高田寄生木―「北貌」
- 高山市生涯学習課―「高山市近代文学館調査・研究報告書」
- たかなん発行所―「たかなん」
- 「太宰治スタディーズ」の会―「太宰治スタディーズ」
- 潮音社―「潮音」
- 童子津軽句会―「津軽通信」
- 胴乱詩社―「胴乱」
- 徳島県立文学書道館―「水脈」
- 十和田かばちえっぽ川柳吟社―「川柳かばちえっぽ」
- 中原中也記念館―「中原中也研究 第二十一号」
- 中村キネ―「北苑ノート」
- 成田本店―「波」
- 新美南吉記念館―「研究紀要」
- 仁科源一―「斜坑」
- 日本近代文学館―「日本近代文学館年誌」
- 日本現代詩歌文学館―「日本現代詩歌研究」
- 日本民主主義文学会弘前支部―「弘前民主文学」
- 野辺地川柳社―「川柳常夜燈」
- 俳人協会―「俳句文学館紀要」
- Platomado―「本のパーキング」
- 八甲田川柳社―「川柳八甲田」
- はちのへ川柳社―「川柳うまっこ」
- 波濤短歌会青森支部―「波濤青森」
- 帆風美術館―「風」
- 萬緑青森支部―「未来」
- 萬緑発行所―「萬緑」
- 姫路文学館―「姫路文学館紀要」
- 弘前詩塾―「弘前詩塾」
- 弘前川柳社―「川柳「林檎」」
- 弘前大学国語国文学会―「弘前大学国語国文学」
- 弘前潮音会―「すべす」
- 弘前文学学校―「文学いちば」
- 弘前ペンクラブ事務局―「弘前ペンクラブニュース」
- 福田正夫詩の会―「焰」
- ふだん記津軽グループ―「ふだん記津軽」
- 文藝軌道の会―「文藝軌道」
- 北狄社―「北狄」
- 松丘保養園松桜会―「甲田の裾」
- 山田尚―「亜土 第二次」
- 山梨県立文学館―「資料と研究」
- 悠短歌会―「悠」
- 「樫」俳句会―「樫」
- 瑠璃の会―「瑠璃」
- 《館報》
- 青森県総合社会教育センター
- 尼崎市総合文化センター
- 荒川区地域文化スポーツ部複合施設準備室
- 有島記念館
- 池波正太郎記念文庫
- 石川近代文学館
- 石坂洋次郎文学記念館

- 泉鏡花記念館
- 一茶記念館
- 井上靖記念館
- いわき市立草野心平記念文学館
- 岩手県立埋蔵文化財センター
- 大島博光記念館
- 大原富枝研究会
- 小川未明文学館
- かごしま近代文学館・メルヘン館
- 神奈川文学振興会
- 金沢文芸館
- 軽井沢高原文庫
- 川西町フレンドリープラザ
- 北九州市立文学館
- 北九州市立松本清張記念館
- 虚子記念文学館
- くまもと文学・歴史館
- 高知県立文学館
- こおりやま文学の森資料館
- 高志の国文学館
- さいたま文学館
- 埼玉文芸家集団
- 坂の上の雲ミュージアム
- 佐々木基一全集刊行会
- 佐藤春夫記念館
- 杉並区立郷土博物館
- 世田谷文学館
- せたがや文化財団
- 全国文学館協議会
- 仙台文学館
- 川内まごころ文学館
- 鷹山宇一記念美術館友の会
- 高山市生涯学習課
- 調布市武者小路実篤記念館
- 壺井栄文学館
- 東京都江戸東京博物館
- 藤村記念館
- 東北大学史料館
- 東北大学総合学術博物館
- 徳島県立文学書道館
- 豊島区立郷土資料館
- 中原中也記念館
- 日本近代文学館
- 日本現代詩歌文学館
- 俳人協会



5 回角川俳句賞副賞
(村上しゅら)
青森県俳句懇話会寄贈資料展で展示中



淡谷悠蔵色紙「一座一会」

寄贈資料紹介

- 俳人協会青森県支部
 - 八戸市博物館
 - 原阿佐緒記念館
 - 姫路文学館
 - 弘前市立郷土文学館
 - 福井県ふるさと文学館
 - 福岡市文学館
 - 文京区立森鷗外記念館
 - 北海道立文学館
 - 前橋文学館
 - 松山市立子規記念博物館
 - 三浦綾子記念文学館
 - 三鷹市山本有三記念館
 - 宮沢賢治学会イーハトーブセンター
 - 宮城二記念館
 - 棟方志功記念館
 - 室生犀星記念館
 - 盛岡てがみ館
 - 山梨県立文学館
 - 吉川英治国民文化振興会
- (寄贈者名は五十音順で敬称を略しました。表記は資料に従って掲載いたしました。)

資料寄贈のお願い

当館では開館以来、皆様からの寄贈と、古書店等からの購入により青森県ゆかりの作家関係資料を収集してまいりましたが、時代の古いものや発行部数の少ないものなど、収集が困難になっている資料が多数ございます。皆様がお持ちの資料で、ご寄贈いただけるものがございましたら、当館にご一報ください。来年度は特に左記の資料を探しております。

寄贈希望の資料

【俳句雑誌】

「萬緑」(通巻10号～53号 昭和23年～26年)
 (通巻453号～578号 平成3年～9年)

「寂光」(昭和22年以前のもの)

「石楠」(大正～昭和26年くらいのもの)

「すすき野」(戦後間もない八戸で創刊)

「蛾虫」(戦後間もない黒石で創刊)

「海流」(戦前の青森俳句会発行)

「みちのく」「はまなす」(戦前八戸で創刊)

「青森県句集」(第7・8・14・15・16・18・46号)

「新青森県句集」(第3・8・10号)

【短歌雑誌】

「和船」(昭和6年に鯉ヶ沢で創刊)

「樹氷」(昭和8年に青森で創刊)

「美籠」(昭和12年に八戸で創刊)

「青森アララギ」(平成2年以前のもの)

【川柳雑誌】

「月刊川柳 みちのく」(大正～昭和19年くらいのもの)

【文芸誌】

無名群(昭和28年～62年発行のもの)

資料収集基本方針

1 佐藤紅緑、秋田雨雀、葛西善蔵、福士幸次郎、石坂洋次郎、北村小松、北畠八穂、高木恭造、太宰治、今官一、寺山修司、三浦哲郎、長部日出雄の青森県を代表する13人の作家、及び明治時代以降の本県出身作家、ゆかりの作家に關したのもの。

(1) 作品が掲載されている図書・雑誌
 (2) 原稿・書簡・書画・印刷物・視聴覚資料・遺品などの特殊資料

(3) 参考・研究文献

※ ゆかりの作家とは、青森県に長期滞在した作家、青森県を舞台とした作品を著した作家、及び青森県人と血縁関係のある作家をいう。

2 近代文学を研究するうえでの基本的な図書・雑誌

(1) 文学辞典、文学年表、文芸年鑑、文芸雑誌総目次・執筆者総索引、各種文庫目録、地図等

(2) 文芸雑誌、文学研究雑誌、復刻雑誌等

館務日誌 平成28年

企画展「本はもう一人のわたし―児童文学者・鈴木喜代春」 開催中～4月10日
 エクステンド常設展示「葛西善蔵―私小説の神様と呼ばれた男」 開催中～5月29日

2月10日 山内崇高氏来館
 2月12日 青森放送取材(※「北の青森!南の高知!ふるさと自慢とことんスペシャル」・大町桂月資料)

3月1日 全国文学館協議会共同展示「3・11 文学館からのメッセージ―大庭れいじの世界」開催(～3月31日)
 デーリー東北新聞取材

3月2日 東奥日報取材
 3月6日 大庭れいじ氏外3名来館
 3月8日 伊藤幸夫氏(こおりやま文学の森資料館館長)来館

3月9日 河北新報取材
 3月12日 新潟日報取材
 3月20日 安田保氏来館

3月25日 青森県俳句懇話会寄贈資料贈呈式(徳才子会長、草野事務局長来館)
 4月3日 鈴木喜代春氏ご家族4名、永瀬由佳氏(マッチャンドカンパニー取締役)、世良啓氏来館

4月8日 乳井昌史氏来館
 4月10日 鈴木喜代春氏ご家族外2名来館
 4月11日 平井軍治氏(青森県文化振興会議理事)来館

4月15日 伊藤愛理氏(波止場の念)来館
 4月16日 岩手県立一関第一高校文芸部(生徒4名、引率1名)来館

4月23日 木下巽氏(金木太幸会会長)来館
 4月24日 加藤捷三氏(青森県歌人懇話会会長)来館

4月28日 青森ペンクラブ3名(梶浦会長他)来館
 4月29日 「三上強二寄贈資料展」開催(～5月25日)

5月2日 小林慎氏(文学で青森を応援する会会長)来館
 5月4日 小笠原定彦氏(八甲田神社名誉宮司)来館

5月8日 櫛引洋一氏(弘前市立郷土文学館企画研究専門官)来館
 5月9日 工藤四代治ご遺族2名来館

5月10日 朝日新聞取材
 5月12日 出版研究会見学(39名)
 5月13日 高木保氏来館

5月15日 日曜講座(竹浪)参加者30名
 5月17日 原明子氏(中原中也記念館学芸担当)来館

5月18日 木原祐輔氏(キハラ株式会社社長)、松岡要氏(日本図書館協会)来館
 5月28日 竹洞早苗氏(青森アララギ会事務局長)来館

5月29日 新日本スライド工業(42名)見学
 6月3日 エクステンド常設展示「石坂洋次郎と太宰治」開催(～11月23日)
 青森朝日放送取材

6月4日 青森テレビ取材
 6月10日 南勉氏(OCコンピュターシステム取締役会長)来館
 BS TBS取材

6月14日 青森県近代文学館文学資料調査員会議
 青森県立図書館協議会见学
 津島園子氏来館

6月19日 渡部芳紀氏(中央大学名誉教授 外2名)来館
 6月20日 金木町赤十字奉仕団(35名)来館

6月25日 館田勝弘氏来館
 7月3日 県高校図書委員研修大会(36名)見学
 7月5日 陸奥新報取材

7月8日 特別展「青函旅した文人たち」開催(～9月22日)
 (テープカット)櫛引洋一氏・竹浪和夫氏・佐藤幸館長

7月14日 三野亜沙子氏来館
 7月22日 長谷川勝則氏(NPO法人つがる野文庫の会理事・事務局長)来館

7月23日 西脇巽氏(青森県啄木会会長)来館
 7月24日 第一回文学講座講師・櫛引洋一氏・山本玲子氏(参加者数51名)

7月26日 安藤宏氏(東京大学大学院教授)来館
 8月3日 佐々木達司氏来館
 8月7日 明石英嗣氏(吉備路文学館館長)来館

8月18日 阿保春仁氏(田舎館村総務課課長)来館
 8月19日 山内則史氏(読売新聞東京本社編集

局文化部)、齋藤三千政氏(弘前ペンクラブ会長)来館
 8月21日 第二回文学講座講師・竹浪和夫氏・牛崎敏哉氏(参加者数52名)

9月2日 小田島一弘氏(鎌倉文学館副館長)外2名来館
 9月8日 岩村雅裕氏(デーリー東北新聞社コミュニティ事業局)来館

9月11日 日曜講座(伊藤)参加者22名
 9月16日 川村真一氏(青森県文化財保護協会事務局)来館

9月18日 青森県立金木高校見学49名
 9月24日 出前講座(太宰治まなびの家・西谷)参加者20名

9月29日 出前講座(青森市読書団体連絡会・伊藤)参加者87名
 今日出海ご遺族2名来館

9月30日 斎藤五月氏(仙北市新潮社記念文学館)来館
 10月6日 出前講座(三本木高校・附属中・西谷)参加者30名

10月13日 出前講座(青森高校・西谷)参加者69名
 10月14日 大柳繁造氏(青森県立三沢航空科学館館長)来館

10月20日 藤田俊雄氏(八戸市立図書館館長)外2名来館
 10月25日 柏谷弘陽氏(横浜町教育長、穂積清美氏(八戸市民新聞社)来館

11月2日 顧偉良氏(弘前学院大学教授)外3名来館
 11月7日 木村美映氏来館

11月11日 出前講座(青森市西部寿大学院・伊藤)参加者26名
 11月14日 出張展「北村小松」開催(於デーリー東北ホール・23日)

11月16日 千錫烈氏(関東学院大准教授)来館
 11月19日 出張展講座(竹浪)参加者17名
 11月20日 出前講座(県文化財保護協会・伊藤)参加者25名

11月21日 野沢省悟氏来館
 11月24日 12月22日 システム更新に伴う特別休館

12月23日 エクステンド常設展示「佐藤紅緑と福士幸次郎―師友の系譜―」開催(～5月28日)



津島園子氏来館



特別展開会式

青森県近代文学館報 第三十四号

発行日 平成二十九年三月十五日

編集発行 青森県近代文学館(青森県立図書館内)

〒030-0184 青森市荒川字藤戸一九七

電話 〇一七三九二五七五

http://www.plib.pref.aomori.jp/